ジェンダーフリー教育の実践研究とその普及

――ジェンダーをめぐる高校生とその両親の意識――

内田伸子[1]　田中京子[2]　荻原万紀子[2]　菊池美千世[2]
増田かやの[2]　富山尚子[3]

お茶の水女子大学と附属高等学校では、新しいジェンダー教育カリキュラムを開発、研究することを目指したプロジェクトを2002年度より連携して行っている。本報告では、主に2003年に実施した高校生のジェンダーに関わる意識ならびに保護者のジェンダーに関わる意識や子育て観についてのアンケート調査の結果について検討する。さらに、2004年度の附属高校の総合的な学習の時間「ジェンダーフリーを学ぶ」（1年生対象）・「国際協力とジェンダー」（2年生対象）の実施内容についても報告する。

1．ジェンダーをめぐる高校生とその両親の意識

【調査の背景】

今回の調査では、(Ⅰ)性差観スケール：自己に関する情報以外のさまざまな事柄や状況を性別に関連づけて認知する枠組み(伊藤，1997)、(Ⅱ)平等主義的性役割態度スケール(短縮版)：性役割に対して平等主義的であるか伝統主義的であるか(鈴木，1994)、の2つのスケール（測定するための尺度）を使用して、性差観、男女差意識、および性別化期待に関する、高校生とその両親の意識の関連について検討を行った。

【調査の方法】

(調査対象)　調査は、東京都内の国立高校3校（男子校A、共学校B、女子校C)、関東近郊の私立女子高校3校(D～F)、の計6校に依頼した。対象学年は、従来との比較のためにこれまでの研究で対象としていた高校2年生とし、その両親とあわせた親子に調査用紙への回答を依頼した。

(調査時期および実施方法)　調査は2003年11月～12月に行った。子どもについては各高校を通じて授業中に実施し、両親については子どもを通じて配布・回収した。調査用紙は、記入後個別に封入する形式で回収した。

(回収状況)　6校あわせて約800組2400名分の調査用紙を配布した結果、1434名分を回収したが、子のみ(81名分)、母子のみ（99組198名分）のデータを除き、385組1155名分の両親と子（以降、親子データとする）の結果を得た。最終的には、回答が不完全なものを除いた354組分の親子データを今回の分析対象としている。（詳細はTable 1を参照)。

(調査項目)　主な調査項目は、以下の通りであった。

(Ⅰ)　性差観：伊藤（1997）により作成された性差観スケール30項目について、そう思う(1) ～ そう思わない(4) の4段階で評定。

(Ⅱ)　平等主義的性役割態度：鈴木（1994）により作成された平等主義的性役割態度スケール短縮版15項目について、まったくその通りだと思う(1) ～ ぜんぜんそう思わない(5) の5段階で評定。

(Ⅲ)　男女差意識：「あなたは普段「女」「男」の違いを意識することがありますか」という質問について、非常にある(1) ～ まったくない(5)　の5段階で評定。

(Ⅳ)　性別化期待：「あなたが女性なら「女らしく」、あなたが男性なら「男らしく」ありたいと思っていますか」という質問について、非常に思っている(1) ～ まったく思っていない(5) の5段階で評定。

(Ⅴ)　子への性別化期待（親のみ）：「あなたは、（今回対象の）お子さんが娘さんであれば「女らしく」、息子さんであれば「男らしく」あってほしいと望んでいま

Table 1　子どもの性および学校別の親子データ数(組)

子ども＝男子		子ども＝女子				
A校	B校	B校	C校	D校	E校	F校
54	26	45	66	49	53	61

キーワード：性差観、平等主義的性役割態度、ジェンダー意識、父親、母親、高校生

1 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
2 お茶の水女子大学附属高等学校
3 東京成徳大学

すか」という質問について、たしかにそうだ(1) ～ まったくそうではない(5) の5段階で評定。

(vi) 「「男は仕事、女は家庭」という考え方がありますが、あなたはこの考え方に同感する方ですか。それとも同感しない方ですか」という質問について、同感する方(1)、どちらともいえない(2)、同感しない方(3)、わからない(4) のいずれかを選択。

(vii) 将来について：対象生徒が女子生徒の場合のみ、親の場合は子どもに対する希望として、職業と仕事の両立の希望（1 就職はしない、2 結婚したら退職する、3 子どもが生まれたら退職する、4 子どもが生まれたら退職し、子どもがある程度大きくなったら再就職する、5 結婚子どもに関わらず、仕事を継続する、6 無回答）を選択。

【結果】

(1) 性差観

Table 2は、学校ごとの性差観得点の結果を示している(ただし、共学校Bについては、子どもの性別ごと)。得点が高いほど、性差観が弱いことを示している。

α係数は、子のみで$\alpha=.90$ (女子のみで$\alpha=.90$、男子のみで$\alpha=.90$)、親のみで$\alpha=.92$（母親のみで$\alpha=.91$、父親のみで$\alpha=.93$）であった。

<子どもデータについて>

はじめに、性差観得点を従属変数とし、性差についての1要因の分散分析を行ったが、有意な差はみられなかった（$F(1,352)=.16$, *n.s.*)。そこで、学校タイプ（ここでは、学校および子どもの性別を組み合わせた7パターン：男子校A、共学校BM、共学校BF、女子校C、女子校D、女子校E、女子校F、を学校差とする、以下同様）についての1要因の分散分析を行った結果、有意差がみられた（$F(6,347)=10.48$, $p<.0001$)。多重比較の結果(Student-Newman-keuls法による、以下同様)、女子校Cは他のすべての女子校と比べて性差観が弱く、男女に関する平等意識が高いと考えられた。ただし、男子校Aとは統計的に差はみられなかった。また、男子校Aの男子のほうが共学校Bの男子より性差観が弱く、男女に関する平等意識が高いという結果が示された。

<保護者データについて>

父親の性差観については、子どもの性別および学校タイプに関する1要因の分散分析を行った結果、いずれも有意な差はみられなかった（$F(1,352)=.31$, *n.s.*, $F(6,347)=1.35$, *n.s.*)。母親の性差観についても同様の分析を行った結果、子どもの性別による差はみられなかった（$F(1,352)=.86$, *n.s.*)。学校タイプに関しては、有意差がみられ($F(6,347)=2.79$, $p<.05$)、多重比較の結果、男子校Aと女子校Fの間に差がみられたが、その他の差はみられなかった。

また、母親および父親の性差観を保護者性差観として被験者内変数とし、学校タイプ×保護者性差観についての2要因分散分析を行った結果、交互作用はみられず（$F(6,347)=.78$, *n.s.*)、保護者性差観の単純主効果のみが有意であった（$F(1,347)=16.08$, $p<.0001$)。このことから、全体として父親(全体の平均性差得点：77.8)よりも母親(全体の平均性差得点：81.7）の方が性差観が弱く、母親の方が男女に関する平等意識が父親よりも高いと考えられた。

Table 2　学校別・親子別の平均性差観得点

	学校名						
	子ども＝男子		子ども＝女子				
	男子校A	共学校BM	共学校BF	女子校C	女子校D	女子校E	女子校F
子ども	84.8(14.0)	73.6(12.6)	78.3(12.9)	89.4(13.1)	73.6(12.0)	81.3(13.0)	77.2(13.4)
母親	85.2(14.9)	78.6(14.7)	84.3(13.2)	83.7(13.3)	80.7(15.4)	82.5(13.6)	76.2(15.4)
父親	79.6(16.8)	71.3(14.7)	80.9(17.6)	79.2(14.9)	78.1(16.7)	76.4(16.8)	76.1(15.6)

（　）内は標準偏差

Table 3　共別学別・男女別の平均性差観得点

	共学	共学	別学	別学	成人	成人
	(本調査)	(1997年)※	(本調査)	(1997年)※	(本調査保護者)	(1997年20～59歳)※
女子	78.3(12.9)	76.4(14.0)	80.9(14.2)	77.0(13.5)	81.7 (14.6)	76.1 (16.6)
男子	73.6(12.6)	73.4(13.9)	84.8(14.0)	69.3(12.1)	77.8 (16.2)	74.6 (15.2)

（　）内は標準偏差，※オリジナルのデータ値から計算した値

さらに、過去のデータ（1997年）との比較のため、Table 3に、共学・別学および男女別にまとめた結果を示した。直接的な比較ではないが値を見ると、1997年の調査結果よりも特に男子校の高校生の性差観の意識が弱くなっていることが読み取れる。

<子どもと保護者のデータの関連について>

子どもの性差観と母親、父親それぞれの性差観の関連についてみてみると、全体としては、子どもと母親の性差観にほとんど相関はみられず($r=.18$)、子どもと父親の性差観には、弱い相関（$r=.25$）がみられた。さらに、学校タイプごとにみてみると、子どもと父親の性差観について、男子校Aでは弱い相関（$r=.27$）が、女子校E($r=.51$)および共学校Bの女子($r=.50$)では、それぞれ中程度の相関がみられた。男子校Aでは、母親の性差観との弱い相関もみられた（$r=.30$）。

また、母親と父親の性差観の関係については、全体としては、弱い相関（$r=.25$）がみられ、学校タイプごとでは、女子校C（$r=.38$）および共学校Bの女子（$r=.30$）では弱い相関が、女子校Dでは中程度の相関（$r=.48$）がみられた。

以上の結果から、男子校Aでは、母親・父親両方の性差観との相関が他の学校よりも高く、子どもと保護者の性差観との関連が考えられた。また、共学校Bの女子については、保護者の性差観に相関があり、中でも子どもの性差観に関連するのは父親の性差観であると考えられた。

(II) 平等主義的性役割態度

Table 4は、学校ごとの平等主義的性役割態度得点の結果を示している（ただし、共学校Bについては、子どもの性別ごと）。得点が高いほど、平等主義的であることを示している。

α係数は、子のみで$\alpha=.86$（女子のみで$\alpha=.85$、男子のみで$\alpha=.86$）、親のみで$\alpha=.88$（母親のみで$\alpha=.85$、父親のみで$\alpha=.89$）であった。

<子どもデータについて>

平等主義的性役割態度得点を従属変数とし、性差についての1要因の分散分析を行った。その結果、有意な差がみられ（$F(1,352)=21.82$, $p<.0001$）、全体として、女子は男子に比べて、平等主義的態度がみられた。

また、学校タイプについての1要因の分散分析を行った結果、有意差がみられた（$F(6,347)=15.91$, $p<.0001$）。多重比較の結果、女子校Cは他の学校と比較して男女に関する平等意識が特に高いと考えられた。

<保護者データについて>

父親の平等主義的性役割態度については、子どもの性別および学校タイプに関する1要因の分散分析を行った結果、いずれも有意な差はみられなかった（$F(1,352)=.85$, *n.s.*, $F(6,347)=1.32$, *n.s.*）。

母親についても同様の分析を行った結果、子どもの性別による差はみられなかった（$F(1,352)=.72$, *n.s.*）が、学校タイプに関しては、有意差がみられた（$F(6,347)=2.32$, $p<.05$）。多重比較の結果、共学校Bの女子と女子校Fの間にのみ差がみられ、その他の差はみられなかった。

また、母親および父親の平等主義的性役割態度を保護者平等主義的性役割態度として被験者内変数とし、学校タイプ×保護者平等主義的性役割態度についての2要因分散分析を行った結果、交互作用はみられず（$F(6,347)=.15$, *n.s.*）、保護者平等主義的性役割態度の単純主効果のみが有意であった（$F(1,347)=52.25$, $p<.0001$）。このことから、全体として父親よりも母親の方に平等主義的態度がみられた。

さらに、直接的な比較ではないが、過去のデータ（1994年）では、成人女性（93名）の得点平均（標準偏差）は54.0（10.1）、成人男性（109名）は46.6（10.1）となっており、今回の母親全体の平均得点56.2(8.5)、父親全体の平均得点51.6（10.4）と比較すると、父親の平等主義的態度得点が若干上昇している。

Table 4　学校別・親子別の平均平等主義的性役割態度得点

	学校名						
	子ども＝男子		子ども＝女子				
	男子校A	共学校BM	共学校BF	女子校C	女子校D	女子校E	女子校F
子ども	52.9 (9.6)	50.6 (7.4)	56.1 (8.5)	62.5 (6.9)	51.5 (7.6)	59.0 (6.0)	55.0 (7.1)
母	57.5 (9.9)	55.4 (9.1)	59.0 (9.1)	56.5 (8.3)	54.9 (7.7)	56.2 (6.9)	53.6 (7.7)
父	53.1(10.9)	51.2(10.1)	53.2(10.2)	53.1(10.9)	51.0 (9.8)	52.1(10.2)	48.5(11.1)

（）内は標準偏差

<子どもと保護者のデータの関連について>

子どもの平等主義的性役割態度と母親、父親それぞれの平等主義的性役割態度の関連についてみてみると、全体としては、子どもと母親、子どもと父親の平等主義的性役割態度には、それぞれ弱い相関($r=.29$, $r=.204$）がみられた。

さらに、学校タイプごとにみてみると、子どもと母親の平等主義的性役割態度について、女子校C（$r=.37$)）および共学校Bの女子（$r=.35$）では弱い相関が、男子校Aでは中程度の相関（$r=.45$）がみられた。子どもと父親の平等主義的性役割態度については、女子校E($r=.30$)および共学校Bの女子($r=.36$)では、弱い相関（$r=.27$）が、学校Bの男子では中程度の相関（$r=.47$）がみられた。

また、母親と父親の平等主義的性役割態度の関係については、全体としては、弱い相関（$r=.29$）がみられた。学校タイプごとでは、女子校C（$r=.37$）および共学校Bの女子（$r=.35$）では弱い相関が、男子校Aでは、中程度の相関（$r=.45$）がみられた。

以上の結果から、共学校Bの女子では、母親・父親両方の平等主義的性役割態度との相関が他の学校よりも高く、さらに保護者の平等主義的性役割態度に相関があり、子どもと保護者の平等主義的性役割態度との関連が考えられた。また、男子校Aおよび女子校Cでは、保護者の平等主義的性役割態度に相関があり、中でも子どもの平等主義的性役割態度に関連するのは母親の平等主義的性役割態度であると考えられた。

(Ⅲ) **男女差意識**：違い認識：「男」と「女」の違いの意識

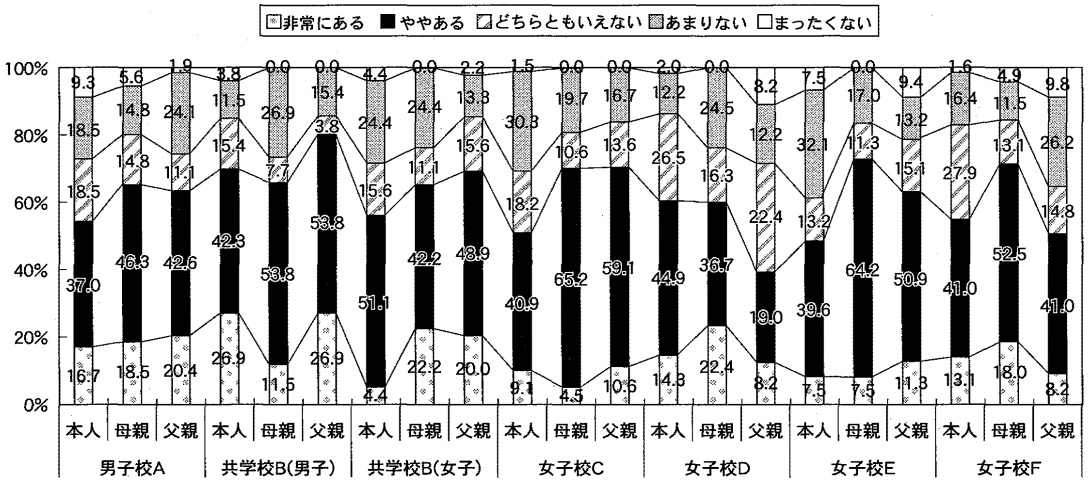

Figure 1　学校別・親子別の男女差意識　(%)

(Ⅳ) **性別化期待**：「女らしく（男らしく）ありたい」と思っているか

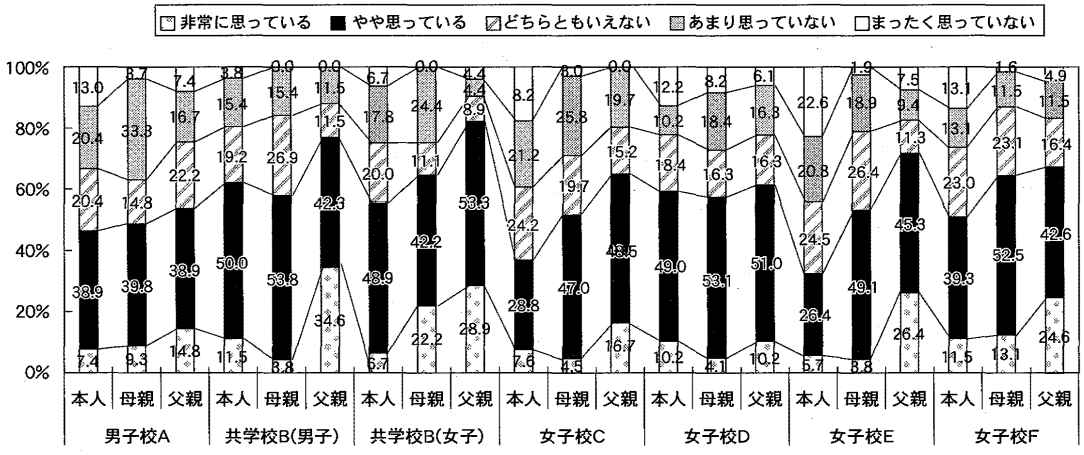

Figure 2　学校別・親子別の性別化期待　(%)

(V) 子への性別化期待（親のみ）：「娘であれば「女らしく」、息子であれば「男らしく」あってほしい」か

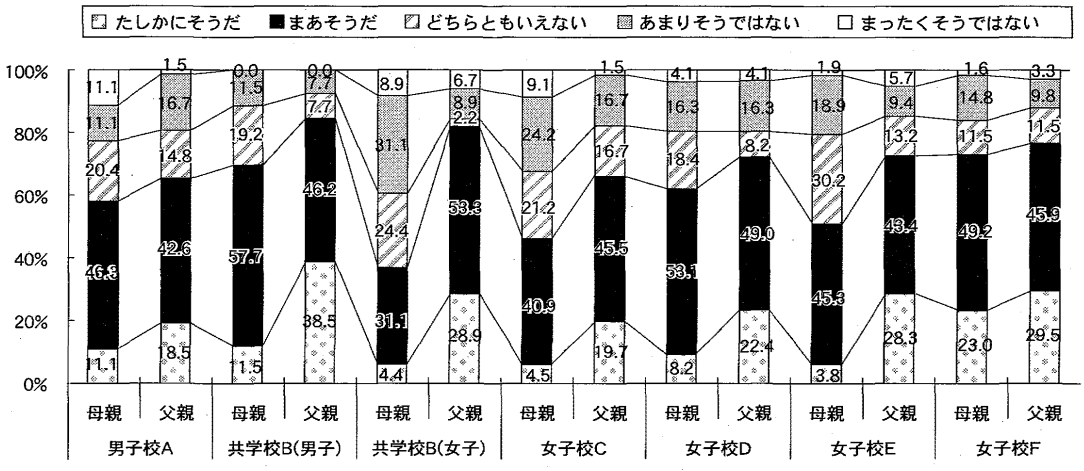

Figure 3　学校別・親別の子への性別化期待　(%)

(VI) 「男は仕事、女は家庭」に同感するか

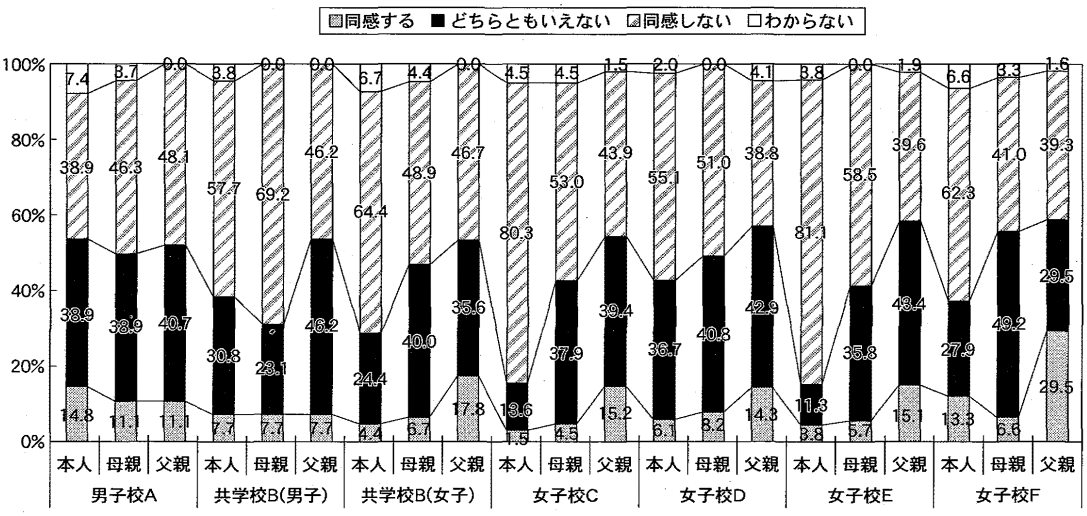

Figure 4　学校別・親子別の「男は仕事、女は家庭」への同感　(%)

(VII) 将来：女子生徒のみ、親の場合は子どもに対する希望として

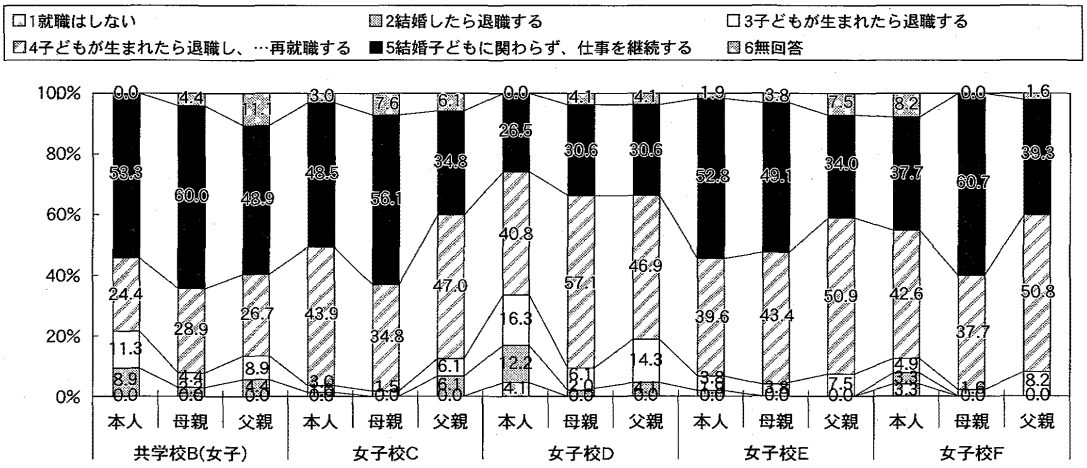

Figure 5　学校別・親子別の女子生徒の将来への期待　(%)

【まとめ】

性差観については、伊藤（1997）のデータでは、高校生では男子が女子に比べて、性差観が強く、さらに男子校の男子の方が共学校の男子よりも、性差観が強いという結果になっていたが、本研究の結果では、高校生のデータに性差はみられず、男子校の男子のほうが共学校の男子より性差観が弱く、男女に関する平等意識が高いという結果が示された。また、直接的な比較ではないが、1997年の調査結果よりも特に男子校の高校生の性差観の意識が弱くなっていることも考えられた。今回の結果は、時代の変化と共に、高校生のジェンダー意識が変化した可能性を示している。

平等主義的態度については、従来の結果と同様に女性は男性に比べて、平等主義的態度がみられた。

さらに、男女差意識、性別化期待、「男は仕事、女は家庭」への同感、女子生徒の将来に期待する職経歴、などの詳細な要因についても、それぞれの状況における特徴を見出すことができた。例えば、共学校において、男子の子どもをもつ母親は、女子の子どもをもつ母親よりも性別化期待が強いことなど、学校環境と養育環境の複雑な関係を示すような結果も見られた。

また、女子校Ｃは、性差観および平等主義的態度のどちらの尺度においても、他の学校と比較して男女に関する平等意識が高いことが示された。女子校Ｃは、お茶の水女子大学附属高等学校であり、唯一ジェンダーに関する特設講座が開かれているなど、他の高校とはジェンダーに関わる学校環境が異なるのではないかと考えられたが、今回の結果は、それを支持するものであった。

残された検討課題は多いが、本調査では、いくつかの異なるタイプの学校の先生、生徒、保護者の方々のご協力を得て、高校生本人だけでなく、その両親も合わせてのデータを収集することができた。本調査の結果は、教育環境だけでなく養育環境の重要性を考えていくうえで大変貴重な資料であり、今後の研究の基礎資料となると期待される。

２．総合的な学習の時間「ジェンダーフリーを学ぶ」および「国際協力とジェンダー」の2004年度実施内容

＜目的＞

2004年度は、ジェンダーフリー教育の充実を図るため、2003年度に引き続き、高校１年生では、初歩的なジェンダーフリー教育（「ジェンダーフリーを学ぶ」）、２年生では、グローバルな視点を含むジェンダーフリー教育（「国際協力とジェンダー」）という２つの講座を実施した。

＜授業概要＞

2004年度の授業スケジュールおよび内容はTable 5（１年生）およびTable 6（２年生）の通りであった。受講者数は、１年生、２年生ともに、13名であった。2003年度の1年時に「ジェンダーフリーを学ぶ」を受講した３名のうち２名が、２年時の「国際協力とジェンダー」を継続受講した。

＜授業時間＞

１年生は、通常の１時間（45分）の授業時間であったが、２年生は、１回の授業を２時間連続（45分×２＝90分）とする授業形態を試みた。 2003年度に試みた２週連続の授業が非常に好評であり、授業内容の理解も高かったことから、２時間続きとすることによって通常の大学の授業時間と同様になり、これまで以上に外部講師の授業の本来の特徴や面白さも発揮されるのではないかと期待された。

結果として、外部講師の授業の際には質疑応答の時間もゆっくりと確保でき、より理解が深まった。また、外部講師がいない授業時も発表や意見交換の時間が十分に取れたことで、十分にテーマを深められた。

＜今後の課題と発展＞

2004年度は、高大連携プロジェクトの３年目にあたり、附属高校での、１年生「ジェンダーフリーを学ぶ」、２年生「国際協力とジェンダー」のカリキュラムも、かなり具体的かつ安定したものになってきた。また、非常に限られた人数ではあるが、昨年から設けた１年生の講座の受講者の中から、２年生の講座を継続受講する生徒が見られたことは、ジェンダーに対する正しい理解と興味を深めるカリキュラムの開発を目指す本プロジェクトにとって、好ましい結果であった。

さらに、2004年度は、高校２年生は、１回の授業を２時間連続とする授業形態を試み、一定の成果を得た。しかし、残念ながら2005年度は、１年生、２年生ともに、１時間（45分）の授業の予定である。2005年度は、短い授業時間でまとまりのある講義を行うためのさらなる工夫が、外部講師側に求められる。

３．引用文献

伊藤裕子　(1997)　高校生における性差観の形成環境と性役割選択―性差観スケール（SGC）作成の試み―．教育心理学研究，**45**，396-404．

鈴木淳子　(1994)　平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S）の作成．心理学研究，**65**，34-41．

Table 5　2004年度1年「ジェンダーフリーを学ぶ」授業実施状況

回	月	日	授　業　内　容	テーマ
1	4	20	・ガイダンス・自己紹介・アンケート（意識・希望調査）	ジェンダーとは
2		27	・個々への問題提起 ・「らしさ」とは何か	問題提起
3	5	11	・性別役割分業の実態（M字型就労の問題を例に考える） ・社会からの影響について考える	ジェンダーの視点から見る日本の社会 ①性別役割分業の実態 ②日本の実態や諸外国の取り組み
4	6	8	・日本の家庭における性役割分業の実態	
5		15	牧野カツコ先生　「性役割分業の実態と諸外国の取り組み」	
6		29	舘　かおる先生　「メディア(コミック・アニメ・おもちゃ)とジェンダー形成」	ジェンダー形成の要因と社会の関係 ①　メディアリテラシー （映画、コマーシャル、ドラマなどの影響）
7	7	6	牧野カツコ先生のお話を踏まえて話し合い ・性別役割分業の実態と問題性 ・諸外国との比較における日本の問題点	
8		13	舘かおる先生のお話を踏まえて話し合い ・メディアがジェンダー形成に与える影響の大きさ ・無意識のうちに刷り込まれてしまう問題性 ・夏休みの課題（個別の課題確認）	
9	9	7	夏休み課題発表	
10		14		
11		21		
12	10	5	松浦悦子先生　「雄と雌－遺伝学からみるジェンダー」	ジェンダーと科学
13		19	松浦悦子先生のお話を踏まえて話し合い ・身体的客観的な違いと「個人の能力」の関係 遺伝子でみる性の研究 女性研究者（科学者）の実態	
14		26	高校生のジェンダーに関する意識調査 「女性のデータブック」を読む	ジェンダーと社会構造 ①婚姻制度の歴史とこれから ②同世代の意識 ③年金問題 ④女性と法律
15	11	2	夏休み課題発表	
		9	**女性と年金問題**	
16		16	戒能民江先生　「女性と法律」	
17		30	戒能民江先生のお話を踏まえて話し合い ・女性問題に関する法律とは ・男女参画社会基本法について ・法曹関係の仕事と女性	
18	12	7	これまでのまとめ、冬休み課題提示	
19	1	18	課題発表	
20	2	25	内田伸子先生　「会話に見られるジェンダー」	心理学から見たジェンダー
21		1	内田伸子先生のお話を踏まえて話し合い ・会話における性差 ・心理学の研究方法の視点	
22		8	本目さよ氏　「心理学の研究～学生の立場から～」	
23		22	本目さんのお話を踏まえて話し合い ・心理学について ・研究を続けることの重要性	
24	3	1	1年間のまとめとアンケート	レポート・感想提出（3/11）

Table 6　2004年度２年「国際協力とジェンダー」授業計画および実施内容

回	月	日	授業予定	連携	講師	授業内容
0	4	14	総合の紹介 希望調査			
1		21	ガイダンス 自己紹介			自己紹介、受講者アンケート
2	5	12	ジェンダーとは		三浦先生	イラク戦争と国際協力2004：新聞記事を資料として+話し合い
3		19	ジェンダーの視点から社会を見直す	学外講師		三浦先生の話に関する話し合い、スピーチ順決め
4		26	ジェンダーの視点から見る日本と世界の現状と課題	ジェンダー研究センター、		ジェンダーとは 定義・実感・気付き
5	6	2	①個人や家庭・地域社会の問題として	文教育学部、	内田先生	会話はどんな役割を果しているか 会話行動の性差 質疑応答
6		9	(現状・課題とその文化的・社会的背景)	生活科学部の先生、		スピーチ(佐藤、下釜) 内田先生の話より 性差とは
7		16	②グローバルな問題として(同上)	院生、留学生	富山先生	心理学とジェンダーの視点 質疑応答
8		30	③各国政府の取り組み			スピーチ(金子、川瀬) 富山先生の話より
9	7	7	１学期のまとめ(感想・討議)			スピーチ(永井、田中) 公開研三浦先生、来週小学校
10		14	夏休み課題の確認(個人調査)			⑥夏休み課題説明 ⑦小学校アフガンの授業に参加
11	9	8	夏休み課題の発表①			夏休み課題の発表①
12		15	夏休み課題の発表②		鷹野先生、水岡氏	イランのお話(革命前とハタミ直前)
13		22	ジェンダーセンシティブな国際協力	学外講師		夏休み課題の発表② スピーチ(岩崎) イラン概略
14	10	6	政府・国際機関・NGOなどの取り組みを中心に	ジェンダー研究センター、	河野先生	国連・NGOの取組、国際協力に必要なこと、人との関わり方
15		20		文教育学部、	伊藤先生	インド女性自営・労働者協会の取組に学ぶ
16		27		生活科学部の先生、		スピーチ(小野里、白根)
17	11	10		院生、留学生		スピーチ(有松)
		12			三浦先生	イスラム世界と私たち-日本のイスラム認識と中東の人々の現実-
18		17				スピーチ(野沢、富谷) 公開研反省
19		24				スピーチ(村山) 三浦先生の授業に関する話合い
20	12	1	冬休み課題(年間テーマ)の確認 ２学期のまとめ		波平先生	海外医療援助とジェンダー(ジェンダー化された身体と医療)
21	1	12	冬休み課題(年間テーマ)の発表①			冬休み課題の発表①
22		19	冬休み課題(年間テーマ)の発表②			冬休み課題の発表②
23	2	2	冬休み課題(年間テーマ)の発表③		黒河内先生	フォスタープラン(Plan International)について
24		9	冬休み課題(年間テーマ)の発表④			今までの先生方のお話しで一番印象深いこと、考えさせられたこと
25		16	冬休み課題(年間テーマ)の発表⑤		河野先生	国際会議の様子と「声」を伝えること
26		23	冬休み課題(年間テーマ)の発表⑥		奈良原さん	In Quest of a Fairer World…And Still in Quest.(バングラデシュの話から)
27	3	2	１年間のまとめ			冬休み課題の発表③ １年間のまとめ
28						